オレンジ革命とウクライナ危機

――経験的ウクライナ論――

天　江　喜七郎*

はじめに

私にとって，ウクライナは知れば知るほど興味が湧いてくる国である。ソフィア・ロレーンとマルチェロ・マストロヤンニ主演の映画「ひまわり」の舞台となったウクライナの大平原は，黄色と空色の二色のウクライナ国旗のごとくシンプルでありながら，しかし有史以来国々の興亡の歴史とそこに生きた人々の物語を覆い包んでいる。私がウクライナに勤務したのは2002年10月から05年10月にかけて丸3年，その大半が「オレンジ革命」の時期である。それから10年，今日ウクライナはロシアによるクリミアの併合とウクライナ東部での親ロ派との武力衝突で，独立後最大の危機を迎えている。

「オレンジ革命」とは何だったのか。2004年の「オレンジ革命」が2014年の「ウクライナ危機」の遠因になっているのではないかという気持ちがしている。本論は2014年12月に神戸学院で開催されたウクライナ研究会での報告をベースに，2015年7月の時点で加筆修正したものである。最後に，文中の意見はすべて筆者の個人的な見解であることをお断りするとともに，事実関係や議論が分かれる部分については専門家の方々のご指摘とご批判を仰ぎたい。

---

*元在ウクライナ特命全権大使

1. ウクライナの過去と現在

私は3年の任期の間，広大なウクライナの大地をできる限り車で走破するよう心がけた。北はベラルーシとの国境に近いチェルノブイリ原発事故現場のプリピャーチ市やロシアと国境を接するスムィ州，南はクリミア半島の風光明媚なヤルタやロシア軍港セヴァストーポリ，詩情豊かな古都バフチサライ，さらにはオデッサ市から「沿ドネストル共和国」の国境を越えてモルドバまで，東はクリヴィイリフの大鉱山を控えるドネプロペトロフシク州やドネツィク州及びルハンシク州の大工業地帯，そして西はポーランドの影響が色濃く残っているリビウ市や日本企業が進出しているハンガリーとの国境の町ウジュホロドなど，蟹の甲羅の形をしたウクライナの外辺を訪問した。山らしい山があるのは西南のカルパチア山脈一帯のみだ。キエフからオデッサ街道を一時間ほど南下すると，針葉樹の森を抜け地平線が望める広大な平野に入る。さらに一時間ほど車を走らせると土の色が茶色から黒褐色に変化する。これが有名な黒土地帯かと納得してさらに地平線の彼方へ車を走らせる。

その豊かな大地には有史以来スキタイやキンメリアなど古代王国の興亡があり，中世にはモンゴル兵が跳梁し，近世に至ってポーランドやロシアなど周辺の大国に併呑された。自由を求めてコサックが自治を勝ち取った時代もあった。ウクライナ東部および南部は「ロシア語圏」，ウクライナ西部は「ウクライナ語圏」と大きく二分されるのはこうした歴史的経緯による。さらにウクライナは，18世紀初めスウェーデンとロシアが戦った大北方戦争，数次にわたる露土戦争，第一次大戦とそれに続くロシア内戦，第二次大戦でのドイツ軍の侵攻，さらには戦後も暫く西部ウクライナでゲリラ戦を展開した「ウクライナ蜂起軍」とソ連軍による討伐など，多くの戦争の舞台となった。またスターリン時代の人為的な飢餓と粛清，ユダヤ人迫害などでも多大な犠牲者を出した。平和そのものに見えるウクライナは多くの修羅場を経験して今日に至っている。

ウクライナが独立したのはソ連が瓦解した1991年12月で，ウクライナ新憲法

が最高会議で可決されたのはその5年後の1996年である。その後ウクライナはほぼ10年毎に大きな変化を遂げた。即ち，2004年末から2005年初めにかけて「オレンジ革命」と呼ばれる政治的変革が，またその10年後の2014年2月にはキエフで騒擾事件が起こり，ヤヌコヴィッチ政権が倒れてポロシェンコ政権が成立した。この2月の政変についてロシアはヤヌコヴィッチ正統政府に対する極右民族主義者による違法なクーデターであると強く非難した。そして4月にはクリミア半島にロシア軍を派遣し住民投票を実施してロシア領に編入，さらに東部のドネツィク州とルハンシク州ではウクライナからの分離独立を主張する親ロ派武装集団を軍事支援した。その結果，東部でのウクライナ軍と親ロ派武装集団との戦闘で多数の死傷者と大量の避難民が発生した。独仏首脳の粘り強い斡旋により2015年2月ミンスクで停戦が合意されたが，その後も東部での戦闘は続いている。

なぜ今日のウクライナ危機が起こったのか。以下においては，2004年の「オレンジ革命」の状況を回顧しながら「危機」の遠因を探りたい。

2.「オレンジ革命」とは何だったのか

(1)「オレンジ革命」前夜

私が新任大使としてレオニード・クチマ大統領に信任状を奉呈したのは2002年10月のことである。クチマは1994年に現職のクラフチューク大統領を破って第2代大統領に就任，1999年11月に再選されて二期目の折り返し点を迎えようとしていた。信任状奉呈終了後，大統領は私を別室に招いて30分ほど懇談した。そこでは1995年の訪日の思い出などが話題になった。その頃クチマ政権は内外に問題を抱え，二年後の大統領選を控えて内政は不透明さを増していた。そこで私は思い切って大統領に対し，ウクライナ政情が必ずしも安定していないように思えるがその原因はどこにあるのか質問してみた。単刀直入な私の質問に大統領はちょっと驚いた様子を見せたが，一瞬沈黙の後「それはユシチェンコだ」と吐き捨てるように言った。

クチマ政権はウクライナのEUおよびNATOへの加盟を公約として掲げる一方で，ロシアとの実務関係を重視するというバランス政策を取っていた。しかし二期目に入ると次第に新興財閥との癒着と強権政治の傾向が強まり，これに対する国民の批判が広まった。2000年には政権を批判した反体制ジャーナリストが殺害される事件が発生，2003年には事もあろうに大統領警護官が事件へのクチマ大統領の関与を示唆する録音テープを持って米国に亡命した。これを機に最高会議では野党勢力による大統領退陣要求が高まり，国内では「クチマのいないウクライナ」運動が広まった。その急先鋒に立ったのは最大野党「我らのウクライナ」を率いたヴィクトル・ユシチェンコ元首相である。こうして第二次クチマ政権後半のウクライナ情勢は，クチマ大統領とヤヌコヴィッチ首相を支持する与党グループと，ユシチェンコとティモシェンコを支持する野党グループの対立が激しさを増して行った。欧米諸国はウクライナの改革を求める一方でスキャンダルまみれのクチマを相手にせずとの態度を鮮明にし，首脳レベルでの国際会議にクチマを招待しないなど心理的な圧力を加えていった。他方，プーチン大統領は孤立感を深めるクチマに秋波を送り，ウクライナを旧ソ連諸国による関税同盟へと誘った。クチマも従来のバランス外交を修正してロシアへの傾斜を深めて行った。このようにウクライナを巡る欧米とロシアの対立は，クチマの任期切れと次期大統領選挙へ向かって水面下で激しさを増して行った。

(2)「オレンジ革命」の発生

クチマの任期満了に伴う大統領選は2004年11月に上位二者による決選投票が行われ，その結果はヤヌコヴィッチ候補がユシチェンコ候補を破って当選と発表された。しかしユシチェンコを支持する野党グループは，選挙に不正があったとしてキエフ市中心部に大規模な抗議デモを繰り出しテント村を設置して議会や行政府を占拠した。市内中央の独立広場はデモ隊が振るオレンジ色のマフラーで埋め尽くされた。フレシチャーチク大通りを埋め尽くしたテント村には，「リビウ」，「オデッサ」，「ハリキフ」など出身地方の看板が立てられた。一方，

ドネツク市ではヤヌコヴィチ支持派がブルーのマフラーをかざしてデモ行進した。そうした緊張感が高まる中で欧州首脳の仲介による与野党の折衝が行われ，12月にやり直し選挙が行われることで危機は回避された。その結果はユシチェンコ候補が僅差で勝利して2005年1月ウクライナ第3代大統領に就任，「オレンジ革命」の成就である。

クチマはプーチン大統領と頻繁に連絡を取り合っていた。プーチンは武力を投入してでもデモ隊を排除すべきであると主張したが，クチマはクワシネフスキー・ポーランド大統領の意見を入れて武力行使を最後まで回避した。これは10年後の2014年2月，ヤヌコヴィッチ大統領の退陣を求める反政府デモに対して武装警察が発砲し流血の惨事を招いたのと極めて対照的である。

(3)「オレンジ革命」の成功と挫折

「オレンジ革命」の現場で強く感じたことがある。それは変革を求める国民のものすごいエネルギーだ。1979年の「イラン・イスラム革命」，そして1991年の「ロシア・エリツィン革命」でも私は現地で同じようなエネルギーを感じた。長い間地下に溜まったマグマが一気に噴き出すのと同じエネルギーである。しかし「革命」を成功に導くには，崇高な目標とその方向性を明確に掲げてくれるカリスマ的指導者の存在が不可欠だ。ユシチェンコが掲げた目標はウクライナの民主改革であり市民社会の建設である。EUスタンダードをウクライナに導入すると言ってもよい。「オレンジ革命」後，ユシチェンコ大統領の就任式に欧米諸国から閣僚級の代表が多数出席したことは，新政府に対する国際社会の高い期待の現れであり，民主改革への協力姿勢を示していた。これに応えるべくユシチェンコは改革派の閣僚や次官を次々に任命して行った。10年続いたクチマ政権の官僚組織がトップダウンで大きく変えられて行ったのである。USAIDやEUは大勢の専門家や技術者をウクライナに送り込んで支援した。「革命」は成功するかに見えた。

他方において，実務レベルでの意識改革は遅々として進まなかった。一例を挙げよう。日本の経済協力の窓口はウクライナ経済省である。日本からの技術

支援を進めるためにキエフに日本センターを設立することで両国は大筋合意し，その具体化のための交渉が進められた。しかし，私が担当大臣や次官と会談して合意したことが局長レベルで抵抗に会うことが少なくなかった。上層部は代わっても実務レベルでの意識は全く変わらなかった。さらに問題は，欧米で教育を受けた優秀な次官が次々と辞めて行ったことだ。理由は給料が低いからで，彼らは民間企業に引き抜かれたのである。次官が代わればまた最初から説明しなければならない。実務レベルの役人は上からの指示がなければ動こうとしない。民主改革とはスローガンばかりで，役人は自分たちの収入にならないことには関心を示さなかった。またウクライナ人の大国意識が潜んでいるようにも思えた。

2005年から2010年までのユシチェンコ大統領の下で，首相，閣僚はめまぐるしく代わった。最高会議選挙のたびに政党の離反集合が行われた。一貫しない政府の態度に国民は次第に愛想を尽かして行った。「オレンジ革命」への期待は一年もしない中に絶望にとって代わられた。

(4)「オレンジ革命」の特徴

2004年の出来事を振り返って印象深い点が幾つかある。その一つは，プーチン大統領のウクライナ情勢への異常なまでの関心である。プーチンは2000年5月の大統領就任後キエフを年1回の割合で訪問しているが，ウクライナ情勢が不透明になる2003年には3回，そして2004年には6回キエフを訪問した。（その後はユシチェンコ政権下の05年と06年に各1回，ヤヌコヴィッチ政権下の2012年に1回のみ。）特に2004年11月のウクライナ大統領選直前には2回キエフを訪問し，ヤヌコヴィッチ大統領候補との良好な関係を誇示した。その様子を見て，私はプーチンがウクライナをロシアの一部のように考えて行動していること，ウクライナ情勢に不安感を持っていることを感じ取った。プーチンの懸念は現実のものとなった。党首が候補者の選挙区に二度も足を運んで応援演説をしたのに候補者が落選すれば党首の顔に泥を塗ることになる。「オレンジ革命」後，ウクライナはプーチンにとってこれまで以上に大きなウェートを占

めるようになった。ユシチェンコ大統領に天然ガス交渉で圧力を加える一方，与党内の派閥争いに乗じてヤヌコヴィッチ派へのテコ入れを図った。その効果は一年もしない中に現れた。

二つ目は，2004年の「オレンジ革命」に際してユシチェンコ陣営がとった戦術である。11月21日に開票の結果ヤヌコヴィッチ候補の当選が発表されるや否や，百万人を超す市民が不正選挙の無効とやり直しを要求して独立広場に繰り出した。また数日を置かずして数百，数千のテントが設置された。行政機能をすべて停止したが市街は不思議なほど落ち着きはらっており，食糧や飲料水の配給は確保されていた。当時を振り返ってみて「オレンジ革命」は自然発生的な面と，事前によく計画され実行に移された面の両面があるように思う。2000年にセルビアで起きた「ブルドーザー革命」や2003年のグルジア「バラ革命」，さらには2005年のキルギスの「チューリップ革命」に見られる一連の民主化運動は，「フリーダムハウス」や「ソロス財団」など欧米の人権擁護グループによって支援されたことが知られている。「オレンジ革命」もその例外ではない。

(5)「オレンジ革命」の立役者たち

●ヴィクトル・ユシチェンコ大統領

ユシチェンコと初めて会談したのは2003年「我らのウクライナ」党本部であった。写真に違わず美男子で，自信に満ちた話し振りと気さくな態度には好感を抱いた。ロシア語で会話をしながら，私は会話の相手がアメリカ人であるかのような錯覚に陥った。ユシチェンコはウクライナがヨーロッパの国としてロシアとも良好な関係を維持し安定した国家となることができる旨語った。ある日独立広場での野党の集会に出かけたことがある。数名の政治家が演説した後で，真っ白なコートに身を包んだティモシェンコがマイクの前に立ち弁舌さわやかに演説した。最後にユシチェンコが舞台に上がった。簡潔ながらも力のこもった演説は大衆の熱狂と喝采を浴びた。ユシチェンコとティモシェンコという美男美女の組み合わせはマスメディアの一面を飾った。

ユシチェンコの人生に大きな試練が訪れたのは，大統領選挙を間近に控えた

2004年9月の週末のことである。ユシチェンコが友人とダーチャで食事をした後，体調を崩して死線をさまよった。明らかに毒物による中毒と判断され，すぐさま飛行機でウィーンの病院に搬送された。しかしその後間もなくスイスの病院に移送された。キエフではもとよりウィーンでも暗殺者の手からユシチェンコを守れないとの判断があったようだ。日本からも九州大学医学部教授でダイオキシン中毒を専門とする医師がキエフを訪問しユシチェンコの治療に当たった。幸い一命は取り留めたが，身体と顔は痛々しいほどに変形した。外国の諜報機関による毒殺未遂説や自作自演説などが噂されたが真相はいまだに闇の中である。

2005年10月，ユシチェンコ大統領は夫人と共に訪日した。ダイオキシン中毒から一年経ってもあばたで変形した顔はそのままだった。地方旅行で上着を脱いだ大統領のワイシャツが血の汗で赤い斑点だらけになっているのを目撃して驚愕した。夫人によれば，それでもだいぶ良くなった方で，大統領選挙の頃はいつ倒れても不思議でないほど消耗していたとのことだった。2014年に翻訳出版されたワクスベルグ著「毒殺」（柏書房）によれば，ウィーンの病院で検査したユシチェンコの血液内のダイオキシンのレベルは標準の人の6千倍に達したとある。ユシチェンコは苦しみに耐えて選挙運動を続け勝利したが，中毒の影響で身体の不調のみならず精神的にも悪影響が起きて，的確な判断力と決断力を保持できなくなったように思う。このように考えれば，「オレンジ革命」後の政治の迷走は，実はユシチェンコ大統領の薬物による体調不良に原因するのではないだろうか。

●カテリーナ・ユシチェンコ夫人

カテリーナ夫人はシカゴ生まれのウクライナ系二世の米国人で，結婚前はUSAID（米国国際開発庁）に勤務していたが，ユシチェンコが国立銀行総裁の時，米国出張の際ジェット機の中で知り合った縁で結婚したといわれる。カテリーナとユシチェンコとの結婚は国内の反ユシチェンコ勢力やロシアには米国の情報機関による政略と受け取られたようだ。カテリーナ夫人は「オレンジ

革命」で大衆集会に顔を見せることはあっても政治的な発言をすることは全くなかった。ユシチェンコが毒を盛られてからは夫君の健康回復に全力を注いでおり，また二人の小さな子供の養育に忙しく政治的な活動をする余裕がなかったように思う。

●ユリア・ティモシェンコ首相

ユシチェンコと並んで「オレンジ革命」のもう一人の立役者は美貌の政治家ユリア・ティモシェンコである。彼女はドニプロペトロフスク出身の実業家であったが，ロシアとの天然ガスの取引により巨万の富を築き「ガスの女王」と綽名された。クチマ政権時代，ユシチェンコ首相の下でエネルギー担当副首相を務めたが，2001年5月にユシチェンコと共にクチマ大統領と袂を分かち，野党「我らのウクライナ」を組織して反クチマ色を鮮明にした。「オレンジ革命」後の2005年1月ユシチェンコ大統領の下でウクライナ初の女性首相に就任した。ティモシェンコは汚職の一掃を政策目標に掲げて，クチマ前政権下での不正行為の摘発に取り組んだ。その中で彼女は，クチマの女婿で新興財閥のヴィクトル・ピンチュークが十数億ドルの資産価値のある国営鉄鋼企業をわずか8千万ドルで落札した件を取り上げ，入札のやり直しを命じた。その結果は外国企業が資産価値に近い価格で落札した。この一件はクチマ政権下で利権を貪った新興財閥を震え上がらせた。ティモシェンコはさらに不正容疑でピンチュークを告発したが，事態を重く見たユシチェンコ大統領はティモシェンコ首相を就任後9ヶ月で解任した。彼女はクチマ政権下でロシアとの不正ガス取引で告訴されたことがあり，彼女の行動はその意趣返しという側面もあったように思う。なお当時の検事総長ピスクンは，ピンチュークの容疑で立件しようとしたところユシチェンコ大統領から突然解任されたと語っている。ポロシェンコ国家安全保障会議書記（当時）が裏で影響力を行使したとも噂されている。

ユシチェンコと袂を分かって与党連合から野党に転じたティモシェンコは2007年9月の最高会議選挙で党派「ティモシェンコ・ブロック」の議席を飛躍的に伸ばし多数派を組織して首相に返り咲いた。これに反比例してユシチェン

コの党派「我らのウクライナ」は支持率を大きく下げた。首相二期目のティモシェンコは2008年にプーチンと交渉してロシア天然ガス輸入問題を解決したが，対ロ政策ではロシア軍の南オセチア侵攻を非難しグルジアの立場を支持するユシチェンコと対立した。さらに「ティモシェンコ・ブロック」などの与党連合は大統領の権限を制限して首相の権限を強化する法案を議会に提出，ユシチェンコとの対立を深めた。2010年1月ティモシェンコは大統領選に立候補し善戦したが，決選投票でヤヌコヴィチ候補に敗北した。

「オレンジ革命」では絶妙のコンビを組んだユシチェンコとティモシェンコが，政権に就くや否や協調よりも対立するようになったのは何故なのか。そこにはいくつかの理由があると思う。第一はティモシェンコの妥協できない性格である。野党としてクチマ政権を攻撃する舌鋒に国民は拍手を送ったが，政権を担う立場に立っても自分の政策に反対するユシチェンコ大統領や有力者のポロシェンコを非難する態度は和らぐことはなかった。第二はプーチンによるウクライナ分断作戦である。ユシチェンコ政権内部の対立はロシアにとってウクライナへの影響を図る絶好の機会である。天然ガス供給問題でプーチンがティモシェンコに譲歩し花を持たせた背景には，ロシアのそのような意図があることは間違いない。

私は2005年2月に首相府で就任間もないティモシェンコと小一時間会談したことがある。彼女の日本に対する期待はウクライナへの企業誘致であり，日本との経済関係を発展させるために訪日したいとも語った。彼女には自分の考えを相手に説明し理解を取り付ける才能があるように感じられた。訪日は2009年になって実現した。彼女の美貌と歯切れのよい発言はマスメディアで好意的に取り上げられ，ウクライナファンを増大させた。財界は彼女の大統領選出馬のため片目のダルマをプレゼントした。

他方，ティモシェンコの周辺には以前から汚職のうわさが絶えなかった。2010年2月に大統領に就任したヤヌコヴィッチは彼女を汚職容疑で告発し，裁判の結果彼女は有罪判決を受けて収監された。結局ティモシェンコは2014年2

月の政変で釈放され5月の大統領選に立候補した。彼女のやつれた姿は国民の同情を呼んだかに見えたが，1回目の投票でポロシェンコ候補に敗北を喫した。

●ヴィクトル・ヤヌコヴィッチ大統領

ヤヌコヴィッチのように首相を二回経験し大統領に上りつめながら一気に権力基盤を失った指導者も珍しい。ヤヌコヴィッチはドネツィク出身でドンバスの経済力を背景に州知事を務め，2002年11月にクチマ大統領の下で首相に抜擢された。青年時代には二度暴力事件を起こし実刑判決を受けたという話である。2003年にウクライナに着任しヤヌコヴィッチ首相に表敬した際も，また2011年1月に京都で再会した時も特段強い印象は受けなかった。ヤヌコヴィッチは自分で行動を起こす指導者型の人物ではなく，お神輿に乗って行動する調整型の政治家であると見えた。ヤヌコヴィッチ首相の下でミコラ・アザーロフが副首相として実務を取り仕切っていた。2004年にキエフ国際空港ターミナル建設への最初の円借款供与が合意されたのはアザーロフの手柄である。

ヤヌコヴィッチはティモシェンコ首相が解任された後，2006年8月に政敵ユシチェンコ大統領の下で首相に就任した。同年の最高会議選挙でヤヌコヴィッチの「地域党」が他党と連立を組み議席の過半数を制したからである。2010年の大統領選でヤヌコヴィッチはティモシェンコに勝利して第4代大統領に就任した。これらはいずれもユシチェンコ側の「敵失」によるものであった。「オレンジ革命」の後ユシチェンコ政権は内部分裂を起こして国民の支持を失っていたからである。ヤヌコヴィッチはクチマ路線を継承したが，市民社会の実現や貧富の格差解消に関心を示さなかったばかりか，ドンバスを中心とする新興財閥にのみ頼って国民から遊離した。外交に関してはEUとの関係が冷却化しロシアへの依存度を高めていった。2014年2月のキエフ騒擾でヤヌコヴィッチは反政府デモを武力で抑える行動に出た。これは2004年の「オレンジ革命」の際の苦い経験によるものであろう。しかし武装警官による行動はデモ隊側の反撃に会い，デモ隊がウクライナ軍の兵器庫を襲って大統領府に向かっているという噂が流れるや，大統領警護隊は一斉に持ち場を放棄，ヤヌコヴィッチは身

の危険を感じて逃亡した。彼は身辺警護の部隊さえ満足にコントロールできなかったのである。

●ペトロ・ポロシェンコ大統領

私がポロシェンコに初めて会ったのは，彼がウクライナ最高会議予算委員長の時である。ポロシェンコの子供たちの名付け親がユシチェンコであり，従って両家は親戚以上の付き合いであるということを知った。その後ポロシェンコが経営するチョコレート会社に招待されて懇談する機会を持った。ポロシェンコは大柄だが万事控え目な性格であり，街頭での大衆集会でもユシチェンコとティモシェンコは最前列に出て演説をするが，ポロシェンコは常に二列目に控えてマイクを握る姿を見せることはなかった。

ポロシェンコは現在49歳，青春時代の20代半ばでソ連崩壊とウクライナ独立を経験している。生まれはオデッサ州だがヴィニッツァに移住，キエフ大学では国際関係学を学び卒業後起業家の道を歩んだ。旧ソ連の新興財閥の多くがコムソモール出身者で利権にすがって財をなしたものが多い中で，ポロシェンコは自分の才覚で親興財閥にのし上がった人物のようである。とはいうものの政権に刃向かっては企業家として成功しないことも知っていたと思う。ポロシェンコが実業家として成功した背後には，政権や新興財閥との付き合いがあった。

ポロシェンコの人脈の広さは注目に値する。2002年のグルジア「バラ革命」を指導したサーカシュヴィリ前大統領はキエフ大学の同窓生で国際関係学を専攻している。なおユシチェンコ元大統領はポロシェンコだけでなくサーカシュヴィリの子供たちの名付け親でもある。三人の緊密な関係が見てとれる。ポロシェンコは2015年5月サーカシュヴィリをオデッサ州知事に任命したが，一国の大統領を務めた人物が他国の一地方の知事に就任するのは異例中の異例といえる。しかしオデッサ州はクリミア半島に繋がり南西部はロシアが実質支配する沿ドネストル自治共和国と境を接する。経済的にもまた安全保障上も重要なオデッサ州をサーカシュヴィリに委ねたのは，それだけポロシェンコの信頼が厚い証拠であろう。なお，首相のヤツェニュークは党派「ティモシェンコ・ブ

ロック」に所属しているが，ユシチェンコが中央銀行総裁の時から薫陶を受けた部下であり，オデッサ州の副知事を経験している。また党派「ポロシェンコ・ブロック」の幹事長を務めるフロイスマン最高会議議長は，ヴィニッツァ出身で地方行政を専門とするテクノクラートである。ポロシェンコは友人や優秀な部下に恵まれている。

さらにポロシェンコは与党以外にも人脈を有している。政治家に転身した90年代後半にポロシェンコはクチマ大統領（当時）の党派に所属しており，クチマの女婿で新興財閥のヴィクトル・ピンチュークと親しい関係を築いた。ユダヤ系のピンチュークはクチマと同じドネプロペトロフスク出身，鉄鋼業で財をなした。国際的なネットワークを有し，キッシンジャー元国務長官をキエフに招いて講演会を開くなど数々の社会活動を行っている。東部での停戦を目的とするミンスク合意の交渉過程で，ポロシェンコはクチマをモスクワに派遣してプーチンと交渉を行わせている。クチマはプーチンと話し合えるほぼ唯一のウクライナ人ではないだろうか。ポロシェンコが大統領に就任して一年が経過したが，困難な状況の中にあって無難に政権を運営できるのは彼の広い人脈に裏打ちされた政治力の賜物かもしれない。

3. ウクライナ危機への対応

●クリミア併合

2013年末から始まったキエフでの騒擾事件は2014年2月にはデモ隊と治安部隊との武力衝突になり，ヤヌコヴィッチ大統領がキエフを脱出してクリミア経由ロシアに逃れた。クリミアのロシア人保護を目的にプーチンがロシア軍の派兵に対する議会の同意を得たのが3月1日で，2週間後の16日にはクリミアで住民投票が行われ97%がロシアへの編入を支持と発表された。その後数日を置かずしてロシアとクリミア共和国は編入条約に署名，ロシア議会が批准承認した。これは異例の早さである。プーチンはこの日の来ることを予想してシミュレーションを行っていたのだろうか。

クリミアに関しては，過半数の住民がロシア系であること，18世紀後半にエカテリーナ女帝がトルコとの戦争で獲得した領土であること，1853年のクリミア戦争で多くのロシア兵士の血が流れたこと，ロシア皇帝や貴族が避暑地ヤルタに宮殿を建設し滞在したこと，プーシキンやチェーホフなどの文豪がクリミアでの作品を残していること，第二次大戦末期にヤルタで米，英，ソ首脳会議が開催され戦後の領土問題が話し合われたことなどから，日本でもプーチンによるクリミア併合を是認するような論調が見られる。しかし，国際法は武力行使や武力による威嚇によって領土を変更することを禁止しており，ロシアの行動はこれに違反している。さらにロシアを含むG5は，ウクライナの残存核兵器のロシアへの移送とIAEAによる査察と引き換えに，ウクライナの主権と領土保全を保障するとの1994年のブダペスト宣言に署名したが，この宣言にも背馳している。3月27日に国連総会が賛成多数でクリミアの住民投票を無効とする決議を採択したのは当然である。

周知の通りクリミアは1954年にロシア共和国連邦からウクライナ共和国に移管された。これは1654年にコサック頭領フメリニツキーがポーランドからウクライナを解放しモスクワ大公国に献上してから丁度300年経った記念すべき年に，クレムリンの権力を握ったフルシチョフがウクライナとの兄弟的きずなを誇示するためにとった措置であった。ウクライナ共産党第一書記を経験したフルシチョフは，スターリン時代にウクライナが人為的飢餓により多くの餓死者を出したことに鑑み，ウクライナの対ロ感情を宥めるためにクリミアの移管を提案したといわれる。いずれにせよ最高権力者フルシチョフの意向に反対する者はおらず，ロシアとウクライナの両最高会議はクリミア移管条約を批准承認し発効させた。今日ロシアの中にはフルシチョフの「気まぐれ」を批判する声があるが，当時ソ連が崩壊することなどは全く想定外のことであり，フルシチョフの行動には深謀遠慮があったと見る方が正しいと思う。さらに1991年12月，ソ連崩壊を決定的にしたエリツィン大統領とクラフチューク大統領の会談で，両首脳はロシアとウクライナの独立を確認し合ったが，その際ロシアからクリ

ミアの帰属について問題を提起したということは聞いたことがない。またウクライナの独立と憲法制定を問う1992年の国民投票ではクリミア自治共和国でも過半数の賛成が得られたのである。

●東部での戦闘

2014年4月，親ロ派武装集団はドネツィク州庁舎や州議会を占拠し「ドネツク人民共和国」建国を宣言，5月には「ルガンスク人民共和国」とともに「ノヴォロシア人民共和国連邦」を結成した。ウクライナ暫定政府および最高会議はその無効を表明し，両州において熾烈な戦闘が行われた。現在まで約6千人の戦死者と多数の負傷者および百万人以上の避難民を出している。ロシアは否定するが，ロシア正規軍の一部が越境，親ロ派武装勢力に戦車やロケットなどの重火器を提供している。7月には戦闘地域の上空を飛行していたマレーシア航空機がミサイルで撃墜され300人近い乗客が犠牲になった。ロシアが親ロ派に提供した対空ミサイルが使用された公算が強い。一連の悲劇を顧みて思うのは，なぜウクライナが武力衝突を回避できなかったかということである。「オレンジ革命」の後に，キエフの中央政府とドネツィク州をはじめとするウクライナ東部諸州が敵対して行政が滞ったという話は聞いていない。ドンバスの大工業地帯には欧州企業が投資の機会を狙っていたし，地元新興財閥のタルータは飛行機をチャーターしてウクライナ在住の各国大使をルハンスク州の製鉄工場に招待した。もとよりドンバスはロシア色の強い地域でありロシアとの経済的なつながりが深い。しかし農村に足を踏み入れると農民はウクライナ語を話している。ウクライナ東部諸州の都市部ではロシア語が日常語だが，農村部ではウクライナ語なのだ。ドンバスはウクライナ独立後もウクライナとロシアの紐帯として機能してきた。東部の分離独立を狙ってドネツィク州庁舎や地方議会を占拠した「指導者」たちの中に，2004年当時私が知り合った地元政治家は一人も含まれていない。

●ウクライナ危機の解決策

2014年9月，独仏両首脳によるプーチンへの精力的な説得により，ウクライ

ナ，ロシア，OSCE，ドネツィク及びルハンシクの親ロ派代表がミンスクで合意文書に署名した。翌2015年2月には，戦闘の停止，重火器の撤退と安全地帯の設置，ウクライナ政府による国境の管理など「ミンスク合意の履行に関する諸措置」が合意された。しかしその後も戦闘が継続したため，3月11日メリケル，オランド，プーチン，ポロシェンコの4首脳が16時間に亘って会談し停戦合意に達した。独仏首脳が仲介に走ったのは，ロシアの違法な軍事介入に対抗してウクライナ防衛のため軍事援助を主張する声が米議会に高まっており，ウクライナを巡って米ロの軍事対立が激化することを危惧したためと伝えられた。既に米軍が西部ウクライナでウクライナ軍の訓練を開始したとの報道があり，ロシアはこれをミンスク合意違反であると非難している。

ウクライナ危機の解決のカギを握っているのはプーチンである。しかしプーチンはロシアの最終目的が奈辺にあるかを明らかにしようとしない。そのようなプーチンの態度にオバマ大統領もメリケル首相も不信感を募らせている。東部に関してロシアはウクライナ政府と分離独立派の地方政府とが交渉して問題を解決すべきだと主張し，ウクライナ政府との直接交渉を避けている。5月末に至り，ロシア最高会議は平時における兵士の死亡者リストを非公開とする法律を採択した。これはウクライナでのロシア軍兵士の死亡が公表されればロシア軍介入の事実を隠ぺいできなくなるためと見られる。ロシアは東部の分離独立とロシアへの併合を目指しているのか，それとも東部地域を no peace, no war の状態に置くことによってクリミア併合を既成事実化しようとするのか，ウクライナの NATO 加盟を阻止することが最終目的なのか，プーチンの考えは明確ではない。

このような状況の下で，事態をどう打開すべきか。対ロ制裁の効果は徐々に効いていると思われるものの，プーチンの政策を変えるまでには行っていない。一方，米国は次期大統領予備選の時期に入り，また中東での IS 対策，イラン核問題などでロシアの協力を必要としている。EU はロシアを非難しつつもギリシャ問題の対処に追われウクライナ問題でこれ以上ロシアとの対立を激化さ

せたくない。目下のところ，ミンスク合意の実現へ向けてロシアに対話と圧力をかけ続ける以外に打つ手はないようだ。

ウクライナ危機以降ウクライナ国民の対ロ感情は急激に悪化した。このような世論を背景に，ポロシェンコ政権は2014年11月にEUとの連合協定を発効させ2020年までの加盟申請を目指す旨表明，またNATOに関しても加盟の障害になる国内法を撤廃するなどの手を打っている。問題は深刻な財政状況であるが，IMFは2015年3月にウクライナに対し4年間で174億ドルを供与する新経済プログラムを承認した。西側諸国によるウクライナ支援が機能しているようだ。ポロシェンコ政権が直面する国内の課題は，既に述べたごとく停戦合意の履行による東部の安定であり，またオレンジ革命で実現できなかった汚職の一掃と民主化のための制度改革である。これを果敢にやり遂げ，ウクライナ国民と国際社会の支持を取り付けることが最も重要な課題であると思う。

この機会に，ウクライナの言語問題について触れたい。ウクライナ憲法は公用語をウクライナ語と定めている。ソ連時代の公用語はロシア語だったが，ウクライナの独立とともにウクライナ語が唯一の公用語になった。ロシア語の使用は禁止されておらず，ウクライナ人は大半がウクライナ語とロシア語のバイリンガルである。他方，言語はそれを使用する民族のアイデンティティーであり民族主義，愛国主義と不可分の関係にある。クリミアの独立と併合，東部の分離主義の動きは政治問題であるが，根っこのところで言語問題が深く絡んでいる。2004年のオレンジ革命と2014年のウクライナ危機でウクライナのロシア離れが加速化され，また時の経過と共にロシア語を話せないウクライナ人の割合が増大して行くだろう。しかしそのことはウクライナの将来にとって望ましいことであろうか。ここでフィンランドの例を取り上げたい。フィンランドの公用語はフィン語とスウェーデン語である。フィンランドが一時期スウェーデンの領土であったためだが，この二つの言語はウラル・アルタイ語とインド・ヨーロッパ語というまったく異なる言語グループに属している。フィンランド人はスウェーデン語を自国語として使用するため，スウェーデン語に近いデン

マーク語やノルウェー語にも精通している。これによって多くのフィンランド企業がスカンジナビア諸国で活躍している。フィンランドの言語政策は同国の国益に多大な貢献をしているのである。ウクライナはフィンランドから学ぶ点が多いのではないだろうか。

4. 大ロシア主義者，ウラジーミル・プーチン大統領

ウクライナ問題のカギを握っているプーチンとはいかなる人物であろうか。伝記作家によれば，少年時代のプーチンは体つきが小柄であるにもかかわらず負けん気が人一倍強く，よく喧嘩をしては相手を打ち負かしたという。喧嘩に負けないためにボクシングを習ったが鼻の骨を折って諦め，それでロシア式柔術「サンボ」を始めてその後柔道に熱中するようになる。プーチン自ら「自分はワルだった」と認めているほどで，性格はキレ易く決して模範的な少年ではなかったようだ。そのワルが柔道を通じて心身ともに成長し，小学校を終える頃にはピオネール（共産少年団）に入団を許されるまでになった。その頃プーチンは第二次大戦中ドイツに潜伏して活躍したソ連諜報員をモデルとした映画を見て感激し，将来はKGBに入って国家に尽くそうと決心した。大学卒業後憧れのKGBに入ったプーチンは，そこでKGBの指導教官からいかに自己をコントロールするかを教わった。さらに柔道がプーチンの人格形成に果たした役割は極めて大きい。「柔道は哲学であり，私の人生に影響を与えた」と本人が語っているように，日々の稽古を通じてプーチンは柔道の技のみならずその精神を学んでいった。2000年9月にプーチン大統領が訪日した際，講道館はプーチンに6段位を意味する紅白のだんだらの帯を授与しようとしたが，「自分はまだその域に達していない」と言って頑として受理しなかったことは記憶に新しい。

プーチンがレニングラード大学を卒業してKGBに入った頃はソ連の最盛期であった。しかし1989年11月に在勤地のドレスデンでベルリンの壁の崩壊とそれに続く西独の東独併合を，また1991年には故郷のサンクトペテルブルグでソ

連崩壊を目撃した。私個人の経験でも，当時のモスクワ市民の悲惨な状況は今でも脳裏に焼き付いている。モスクワ中央のカリーニン大通りを横切る地下道には物乞いが列を作っており，その中に生まれたばかりの子犬や子猫を手に抱えて買い手を待っている老婆たちの姿があった。その裏通りのアルバート通りではレーニン勲章から軍用時計や鉄かぶとに至るまで，所狭しとばかり屋台の上に並べて売られていた。ソ連崩壊後の1992年1年間に約3千人の元ソ連軍将校が自殺したと地元紙に小さく報じられたのは暫く経ってからのことである。プーチンもサンクトペテルブルグでこれと同じ状況を目にしていると思う。「ソ連邦の崩壊は20世紀最大の地政学的悲劇である」とのプーチンの言葉は，自らの体験に基づいた感慨そのものに他ならない。

プーチンの「夢」は，かつてソ連邦が手にした超大国の地位を回復することである。しかし今日共産主義に基づく超大国の復活を実現する可能性はない。プーチンはそのカギをロシアの歴史の中に求めた。ある書物によれば，プーチンが尊敬する歴史上の人物はニコライ一世（在位1825-1855年）のようだ。確かに，KGBの源流を辿れば帝政ロシア時代にニコライ一世が創設した「皇帝官房第三課（Tretyi Otdel）」に行きつく。ニコライ一世はナポレオン戦争後にロシアを風靡した自由主義的な風潮を弾圧するとともに，ポーランドやハンガリーの独立運動を力で窒息させた。また汎スラヴ主義を掲げてバルカン半島南部への勢力拡大を図るとともに，アジアでも欧米に対抗して影響力の浸透を図った。プチャーチン提督を幕末の日本に派遣したのもその一環である。ニコライ一世の南下政策は1853-56年のクリミア戦争の敗北と皇帝の死で挫折する。後世の史家は，その160年後のプーチン大統領によるクリミアの併合をニコライ一世の意趣返しと形容するかも知れない。

2012年5月に第4代大統領に就任してからのプーチンは，2000-2008年の第2代大統領当時とは明らかに違ってきたように思う。それは多くの場合，協調よりも独断専行の形を取ってきている。それだけ最高指導者としての経験を積んだということか，或いは周囲に意見を言える人がいなくなったということか

もしれない。その典型的な例がウクライナ危機である。危機に際してのプーチンの行動には，柔道によって培われた忍耐と自己制御のこころに代わって少年時代のキレ易い性格が表れているように思う。確かに，プーチンは2004年の「オレンジ革命」の苦い経験からウクライナが再び西側の影響下に置かれないようヤヌコヴィッチを指導し，その結果は上手く行っているように見えた。従って2014年2月のヤヌコヴィッチ政権の崩壊はプーチンにとって予想もしなかった最悪の事態であった。プーチンは2013年末からのキエフ騒擾事件が右翼ネオナチによる非合法な権力奪取であり，その背後では米国が糸を引いていると捉えた。それ以来ロシアの動きにはこれまでに見られなかった「ハイブリッド型」の行動が目立つようになる。即ち，ロシアはウクライナ東部での軍事的プレゼンスに加えて政治，経済，外交的手段を駆使して西側に揺さぶりをかけ，広報と諜報を織り交ぜて世界のメディアにロシアの正当性を訴え，さらには核の使用をもちらつかせるという行動である。ウクライナや米国がロシア軍越境の証拠を明らかにしても，プーチンはその事実を否定しながら軍事行動を中止する気はない。ロシア国内において政府に批判的なメディアは既に存在せず，また野党リーダーのネムツォフまでがモスクワ市内で白昼射殺されるなど，プーチンに対する批判は完全に抑え込まれている。さらにロシア・ナショナリズムの高揚でプーチンの支持率は約80%と高止まりしている。プーチンは時間の経過と共にロシアが有利な立場に立つと予想しているのではないか。他方，対ロ経済制裁がロシア経済の足を引っ張り，クリミアとウクライナ東部への財政支出が重荷になっていくことも事実である。問題はプーチンが妥協するそぶりを一切示していないことだ。前述のようにプーチンの最大の目標は大ロシアの復活であり，ウクライナのNATO加盟阻止はロシアの安全保障上の大前提だからだ。

5. 日本のとるべき政策

2015年6月，安倍総理大臣はわが国の首相として初めて公式にウクライナを

訪問した。日本とウクライナが国交を樹立したのはウクライナが独立を宣言した後の1992年で，その後1995年にクチマ大統領，2005年にユシチェンコ大統領，2008年にティモシェンコ首相，そして2011年にはヤヌコヴィッチ大統領がそれぞれ訪日している。同時期に行われたドイツでのG7サミット会合ではウクライナ問題が議題に上がっており，安倍首相のキエフ訪問は時宜にかなったものと言える。ポロシェンコとの首脳会談において安倍首相より，力による国境の現状変更は容認できずウクライナの主権と領土の一体性を尊重し，すべての当事者によるミンスク合意の完全な履行を求めるとの基本的立場が表明された。これはロシアとの間に領土問題を抱える日本にとって当然のことであり，またアジアにおける中国の行動をけん制する上で極めて重要なポイントである。

中国との関連で付記すべきことがある。中国はウクライナが保有する旧ソ連邦の軍事能力に強い関心を持っていることだ。現在でもウクライナは超大型輸送機「ルスラン」やICBM改造の「ドニプロ」ロケット，戦車や軍艦などの製造能力を有するのみならず，大学や科学アカデミーでは軍事転用可能な基礎科学の研究が行われている。ソ連時代にウクライナのミコラーエフ海軍工廠で進水した空母「ヴァリャーグ」が1998年にウクライナからマカオ経由で中国に売却され，改装されて空母「遼寧」として青島に配属されたことは記憶に新しい。また基礎研究で有名な国立キエフ工科大学には，2004年当時で既に500人を超す中国人学生が留学していた事実を指摘しておきたい。このように見てくると，ウクライナは国際情勢や安全保障の分野で日本が定期的に意見交換を行う相手国として十分な資格がある。

次に，ウクライナは1991年の独立後，米国やEU諸国の支援を得て国づくりに努力してきたものの，市民社会の創造に必要な民生改革が遅れている点は否めない。安倍首相からは，ウクライナの経済状況改善のため約18.4億ドルの経済支援を実施中である旨の説明がなされた。また民生改革への支援としてパトカー1,500台が寄贈された。旧ソ連における交通警察の収賄は慢性的な問題であり健全な市民社会の発展と相容れない。これを機にソフトの面でも協力関係

が進むことを期待したい。日本はこれまでにも残存核兵器の処理，チェルノブイリ医療協力や石棺建設，初の円借款によるキエフ国際空港ターミナル建設などかなりの援助を行ってきた。今回は特にキエフ下水処理場改修工事に1,100億円の円借款が供与されたことで，日本はウクライナに対する最大級のドナー国になった。

ウクライナ危機に関して，日本はこれが力による国境の変更であり明らかな国際法違反であって安保理常任理事国の行動としては極めて遺憾なことであるとの立場を明確にした。これは当然のことであり，対ソ制裁に参加したことには理由がある。他方で，日本とロシアは北方領土問題を抱える隣国であり，両国の政権基盤が安定している現在が交渉に適していることも事実である。さらにロシアの中国接近が東アジア情勢にどのような影響を及ぼすか見極める必要がある。2015年から2016年にかけてG7議長国としての日本は，ウクライナ危機に関して平和的解決へ向けて積極的に行動していく態度が求められよう。その際ロシアとの意思疎通を図ることがこれまで以上に重要になってくる。G7の団結を維持しつつ，ウクライナやポーランドに加えてロシアとの関係が深いフィンランドやベラルーシのような諸国とも協力関係を築いて行き，そうした各国との連携の上に立ってプーチンに対してはウクライナ危機を現状のまま放置することはロシアにとっても決してプラスではないことを諄々と説いて行くべきであろう。

他方，北方領土問題に関してわが国はウクライナ問題とは別個の問題としてロシア側と話し合うべきであろう。問題の歴史的経緯からして同一には扱えないからである。ロシアは日本がウクライナ問題でG7の一員として対ロ制裁に参加している以上，日本とは領土問題を議論する立場にないとの態度を取っているものと思われる。或いは領土問題に前向きのジェスチャーを示すことによってG7の団結を崩すことを目指してくるかも知れない。前述の通りウクライナ危機を通じて見られたプーチンの態度には問題が多い。ウクライナについてもまた北方領土問題に関しても，現状においてプーチンが根本的解決を目指すと

は思われないが，少なくともプーチンが講道館で示した柔道のこころを呼び起こし，対決ではなく自制を示す時期に来ていることを説くのは日本の役割であろう。

追記：本稿は，ウクライナ研究会第32回定例研究報告会（2014年12月13日，於神戸学院大学）における報告を起稿したものである。

The "Orange Revolution": An Overture to the Ukrainian Crisis?

Kishichiro Amae*

This short report is based upon my personal experience and the observation of the Ukranian situation in 2002-2005. This period was coincided with the so-called "Orange Revolution".

Upon my arrival, Ukraine was already split into two political rivalries: the governing group led by President L. Kuchma and Prime Minister V. Yanukovich on one side, and the opposition party "Our Ukraine" led by V. Yushchenko and Y. Tymoshenko on the other. In November, 2004 when the official announcement was made that Yanukovich won the presidential election over Yushchenko in the run-off ballot, tens of thousands demonstrators rushed into Kiev's Independent Square, claiming that the ballot was gravely manipulated by the government. Within a few days more and more protestors arrived in the capital from the provinces, and they elected numerous numbers of tents in the main street. The parliament was stormed and the government offices were forced to close for more than a month. European leaders finally brokered a resolution when the situation turned tense. Both Yanukovich and Yushchenko agreed to hold a new ballot in December, which resulted in Yushchenko's victory.

Closely watching the course of events, I noticed the following:

President V. Putin's personal interference in the presidential election campaign

*Ambassador to Ukraine (2002-05)

was more than striking. He visited Kiev twice just before the November ballot, apparently showing his strong support to Yanukovich. He visited Ukraine three times in 2003 and 6 times in 2004, which was quite unusual. Putin, whose ultimate goal is to regain the global power status of Russia, considers Ukraine as an integral part of Great Russia. Having appalled by Yanukovich's defeat in the election 2004, Putin may have determined to take a more sophisticated approach toward Ukraine.

My second observation is that the Orange Revolution occurred more or less spontaneously, though it was assisted by foreign supporters of the "Rose Revolution" in Georgia in 2003. It is also an open secret that US based NGOs, such as Freedom House and Solos Fund, supported western-style democratization of the former Soviet Union and the East Europe after the collapse of Berlin Wall. Furthermore, approximately three million Ukranians emigrated to the US and Canada since the end of WW2. Those émigrés set up interest groups to influence the government policies toward Ukraine.

Why did "Orange Revolution" fail then? I would like to point out several reasons. The first reason was the lack of unity among Ukrainian leaders. In particular, there was considerable discord between Yushchenko and Tymoshenko. Both, photogenic and intelligent, were excellent running mates in the Orange Revolution; but after Tymoshenko was appointed PM, she made anti-corruption campaign her top priority, without fully consulting with the president. She targeted oligarchs such as V. Pinchuk, who, son-in-law of Kuchma, dubiously won a tender of a privatized steel company. But her anti-corruption campaign was opposed by other comrades, who claimed that she herself was among the corrupt. Finally Tymoshenko was dismissed by Yushchenko in September 2005.

Another reason the revolution failed was the aftermath of Yushchenko's leadership. He was sickened after he had a private dinner with his friends two months be

fore the election. He was hastily airlifted to a hospital in Vienna and later treated in Geneva. He survived, but his mind and body was deeply marred because of a large quantity of dioxin. He lost his handsome feature as well as his strong character.

The third reason was perhaps difficult to prove. After the Orange Revolution, Putin could not be happy at all to see Ukraine slip out of his hand. He started putting pressure to Ukraine by squeezing its gas supply and through other measures. He continuously discredited Yushchenko. He made a deliberate compromise with Tymoshenko, who ascended to her second term as PM, in conjunction with a gas deal with Russia. Animosity between Yushchenko and Tymoshenko gave a windfall profit to Putin-backed Yanukovich, who won the presidential election in 2010.

Yanukovich's sudden departure from the presidency was another shock to Putin. He did not hesitate to control Crimea by force and to interfere in the armed conflict in Donetsk and Lugansk. Despite the Minsk Agreement in February 2014 the Russian military presence in the eastern region has been witnessed and a ceasefire has yet been realized. Ukraine would do well to reflect deeply on its current situation. Now, the leadership of President Poroshenko and the whole nation seem to be far more united than before, sensing Ukraine's existence to be threatened by Russia.